

ダニエルの書 - 第八十三号

ラオディキア的アドベンティズムの四世代——エスカレートする忌むべき所業を解き明かす

Jeff Pippenger

2024-02-16

エゼキエル書8章は、増し加わっていく四つの忌むべき事柄を示しており、それはラオディキア的アドベンチズムの四世代を表している。1863年の反逆は、ちょうど神がモーセに十戒の二枚の石板を授けておられたその時に、アロンが金の子牛で妬みの像の偽物を作り出したのと同様に、ハバククの二枚の板に対する偽物を生み出した。ウィリアム・ミラーの夢に表されているように、基礎的真理を取り除く働きをラオディキア的アドベンチズムがいったん始めると、第一世代の指導部は聖書の権威を退け、次いで預言の霊も退け始めた。その反逆は増大し、1888年直前にケログの心霊主義（汎神論）が彼らの歴史に到来するに至った。

1888年の反逆の際、エゼキエルの「偶像の室」に象徴される心霊主義は、ミネアポリスの使者たちと女預言者、さらには聖霊さえもが拒絶される場所にまで至った。

私たちは経験から、主が聖所の開かれた戸からご自分の民に光をお送りになるとき、サタンが多くの人々の心をかき立てるのを見てきました。しかし、終わりはまだ来ていません。光に逆らい、神が光を伝える器とされた者たちを押しよける者たちが現れるでしょう。霊的な事柄は霊的に見分けられていません。見張り人たちは神の開かれたつある摂理に歩調を合わせておらず、真に天から遣わされたメッセージと使者は嘲られています。

この会合からは、真理を知っていると主張する人々が去って行くが、彼らは天の機で織られたのではない衣を魂のまわりにまといつつある。彼らはここで受けた霊を携えて行く。私は、私たちの大義の将来を思うと震える。この場で神が与えた証拠に屈しない者たちは、神が用いておられる兄弟たちに対して戦いを挑むだろう。これまで従事してきたのと同じ類の戦いをさらに押し進めることのできる機会が訪れると、彼らは事を非常に困難にするだろう。こうした人々には、自分たちが神の聖霊に敵対して戦ってきたのだと悟る機会が与えられる。ある者は納得するが、他の者は自分の霊に固執する。彼らは自我に死んで、主イエスを自分の心に迎え入れようとしない。彼らはますます欺かれて、ついには真理と義を見分けられなくなる。彼らは別の霊のもとに、神が是認されない型をこの働きに押し付けようとし、また、人の心を支配し、もって神の働きと大義を支配しようとして、サタンの性質を行動に移そうと努めるだろう。

「もし私たちの兄弟たちがこの会合で断食して祈り、神の前に心を低くし、落ち着いて共に聖書を調べるために腰を据えていたなら、神は崇められたであろう。しかし、その会合に持ち込まれた偏見の霊が、神の最も豊かな祝福への戸を閉ざした。そして、この霊を抱いていた者たちは、神の前に悔い改めて、聖霊を侮り、別の霊を持つところまでどれほど近づいていたかを多少なりとも悟るまでは、光を見るにふさわしい状態にはならないであろう。」『1888年の資料』 832。

1888年以降、ホワイト姉妹は神の教会とその働きの将来を思って「震えた」。彼女は、その会合がラオデキア的アドベンチズムの指導者である男たちの間に継続的な霊的戦いを生み出すことになるのを見ており、また「the daily」をめぐる論争は、彼女の予言がまさにその世代において成就したことの証拠である。その後、「天から送られたメッセージと使者」を確認するために「神が与えた証拠に屈しなかった」人々によって戦いが遂行され、その人々は「神の聖霊」に対して戦いを挑んだ。第2世代は、出版社とサナトリウムが神の裁きの火によって焼け落ちるのを目の当たりにした。

本日、ダニエルズ長老から、火災によってReview社の事務所が破壊された件に関する手紙を受け取りました。事業にとっての大きな損失を思うと、たいへん悲しく感じます。働きの責任を担っている兄弟たちや事務所の職員にとって、今は非常に試練の時であるに違いないことを私はよく知っています。苦しむ者とともに、私も苦しんでいます。しかし、この悲しい知らせに私は驚きませんでした。というのも、夜の幻の中で、火のような剣をバトルクリークの上に差し伸べて立つ天使を見たからです。ある日中、手にペンを持ったまま意識を失い、この炎の剣が、まず一方へ、次に別の方へと向きを変えているかのように思われました。人々が自分を高め、自らを栄光化しようとして策をめぐらし、神が侮られたために、災厄が次々と続くように思われたのです。

今朝、私は、主がレビュー・アンド・ヘラルド事務所に関係するすべての人々を導き、彼らが丹念に探し求め、神が与えてこられた多くのメッセージをどの点でないがしろにしてきたのかを見いだせるようにと、切に祈られました。

しばらく前、Review 事務所の兄弟たちが、もう一棟の建物を建てることについて私の助言を求めた。私はそのときこう言った。Review and Herald 事務所に建物をもう一棟増やすことに賛成している人々が、もし自分たちの前に将来が見取り図のように広がっていて、バトルクリークで何が起こるかを見ることができれば、そこにもう一棟建てることについて疑問の余地はなくなるだろう。神は言われた。「わたしの言葉は侮られてきた。わたしは覆し、さらに覆す。」

1901年、バトルクリークで開かれた総会において、主は御自分の民に、改革を求めておられることの証しをお与えになった。人々の良心は責められ、心は打たれた。しかし、徹底した取り組みはなされなかった。もしそのとき、頑なな心が神の御前で悔い砕かれていたなら、これまでに見られた中でも最も偉大な神の力の現れの一つが目撃されたであろう。だが、神はあがめられなかった。御霊の証しは顧みられなかった。人々は、主のみわざにおいて常に堅持されるべき真理と義の原則に明確に反する慣行と決別しなかった。

ご自身の民のために私に教えを与える方は、エペソの教会へのメッセージとサルディスの教会へのメッセージを、私にしばしば繰り返してこられた。「エペソにある教会の御使いに書き送れ。右の手に七つの星を握り、七つの金の燭台の間を歩まれる方がこう言われる。わたしはあなたの行いと労苦と忍耐、またあなたが悪を行う者たちを容認しないことを知っている。自分は使徒だと言いながらそうでない者たちを試し、彼らが偽り者であることを見抜いた。あなたは堪え忍び、忍耐し、わたしの名のために労し、くじけなかった。しかし、あなたに対して責むべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。だから、あなたがどこから落ちたかを思い起こし、悔い改

めて、初めの行いをしなさい。もし悔い改めないなら、わたしはすぐにあなたのところに行き、あなたの燭台をその置かれた所から取り除いてしまう。」黙示録 2:1-5。

「サルディスにある教会の御使いに書け。神の七つの御霊と七つの星を持っておられる方がこう言われる。わたしはあなたの行いを知っている。あなたは生きているという名を持っているが、実は死んでいる。目を覚まして、なお残っていて死にかけているものを強めなさい。あなたの行いが神の前で完全であるのを、わたしは見いださなかったからである。だから、あなたがどのように受け、また聞いたかを思い起こし、それを守り、悔い改めなさい。もし目を覚ましていなければ、わたしは盗人のようにあなたのところに来る。わたしがいつあなたのところに来るか、あなたにはわからないであろう。」黙示録 3:1-3

私たちはこれらの警告の成就を目の当たりにしている。聖句がこれらほど厳密に成就したことは、かつてない。

人は最も入念に造られた耐火性の建物を建てることができても、神の御手のひと触れ、天からの火の粉ひとつが、あらゆる避け所を一掃してしまう。

「私に何か助言があるかどうか、尋ねられた。私はすでに、神が私に与えられた助言を述べてきた。バトルクリークに差し迫っていた燃える剣が振り下ろされるのを防ぎたいと望みつつ、ところが、私が恐れていたことが起こった—『レビュー・アンド・ヘラルド』の建物が焼け落ちたという知らせである。この知らせが届いたとき、私は少しも驚かず、語るべき言葉もなかった。これまで時おり警告として語らざるを得なかったことは、聞いた人々の心をかたくなにする以外、何の効果もなかった。いま私が言えるのはただ一つ、この打撃が来ねばならなかったことを、本当に、心から残念に思う、ということだけである。十分な光はすでに与えられている。それが実行に移されていたなら、さらに光は必要なかったであろう。」『証言』第8巻、97-99ページ。

アドベンチズムの第二世代は勝利に終わらず、エゼキエル書第八章の成就として、反逆はさらに激化し続けた。

書面による知らせと火災によって、主は、ご自分の民がバトルクリークから出て行くことを望んでおられると宣言された。神が、私たちがその御声を聞くことができるよう助けてくださいますように。バトルクリークにある私たちの二大機関が火災で焼失したことが、私たちにとって何の意味もないというのでしょうか。あなたがたは言うかもしれない、「しかし新しいサナトリウムには多くの患者がいるではないか」と。そうです。しかし、たとえそこに何千人もの患者がいたとしても、それは、私たちの民がバトルクリークに家を建て、そこに定住することを正当化する理由にはなりません。

「誘惑は募っている。人々は、神がその御霊の証しによってお与えになった光を退け、自分たちの案や計画を選んでいいる。人々はこのまま神から離れ続けるのか。神は、すでにそうしてこられた以上に、さらにはっきりとその御怒りを示さなければならないのか。」パンフレット, SpTB06, 45.

人々は「自分たちの思いつきと自分たちの計画を選び取って」いた。これは、エゼキエル書第八章の「幻像の間」にいる七十人の長老たちに象徴されており、彼らは「主は私たち

を見ておられない」と宣言した。主は女預言者を起こし、1884年まできっかり四十年間、彼女に「開かれた幻」を与えられた。主はこの賜物にご自身の印を押された。というのも、それはポートランドという名の都市で与えられ、また終わらせられ、さらにその期間は四十年であったからである。「開かれた幻」が止む直前の1881年と1882年に、古老たちは聖書と預言の霊の権威を弱体化させ始めた。こうして「開かれた幻」は1884年に終わり、それから四年後、1888年の総会において、コラ、ダタン、アビラムの反逆が繰り返された。

1888年の反逆は反逆の激化を招き、神が出版事業と医療事業を焼き払うというかたちでラオデキア的アドベンチズムの歴史に直接介入した。しかし、そのような直接の裁きによっても、進行中の反逆は抑止されなかった。1919年には聖書会議が開かれ、そこでは、第二世代の主要な反逆者の一人であり、背教的なプロテスタントの諸大学で訓練を受けた神学者ウィリアム・ウォレン・プレスコットが、「the daily」がキリストの聖所での働きを表していると主張するサタンの見解を推し進める中心的指導者として、一連の講演を行った。

史実によれば、1919年のその聖書会議で、プレスコットは、ミラー派の預言的メッセージのあらゆる要点を取り除くことから成る福音を提示した。彼は二千三百日さえも取り除こうとしたが、それを成し遂げることはできなかった。それでも彼は、ミラー派の預言理解を完全に欠いた福音を提示した。彼の福音はその会合で退けられたが、それでもなお、盲目的な指導者たちは彼の一連の講演を取り上げ、「キリストの教義」と題する書物にまとめることを決定した。その書は、ラオデキア的アドベンチズムの第三世代の到来を象徴するものとなった。

その書は、ハバクク書2章に基づくミラー派の福音とは異なる別の福音を示しており、パウロは別の福音はそもそも福音ではないと私たちに教えています。

私は驚いている。あなたがたが、キリストの恵みによってあなたがたを召してくださった方から、こんなにも早く離れて、別の福音へと移ってしまったことに。ほかの福音などあるわけではありません。ただ、あなたがたをかき乱し、キリストの福音をゆがめようとしている者たちがいるだけです。たとい私たち自身であれ、天からの御使いであれ、私たちがあなたがたに宣べ伝えたものと異なる福音をあなたがたに宣べ伝えるなら、その者はのろわれよ。前にも言ったように、今また言います。だれかが、あなたがたが受けたものと異なる福音をあなたがたに宣べ伝えるなら、その者はのろわれよ。ガラテヤ人への手紙 1:6-9。

アドベンチズムの第三世代は、女たちがタンムズのために嘆き泣いている、エゼキエルの第三の忌むべき行為によって表されている。タンムズは、豊穡と植生の循環に結びつけられたメソポタミアの神であった。タンムズは、ときに羊飼いまは若者として描かれ、季節の移り変わりや作物の生長と関連づけられた。タンムズの死とその後の復活は、農耕暦に結びつけられていた。神話によれば、タンムズは夏の数カ月のあいだ死ぬか姿を消すとされ、これは暑く乾いた季節に植生がしおれることの象徴と見なされた。タンムズのための嘆きは、夏のあいだに起こるタンムズの死または失踪を嘆き悲しみ、その後の復活を喜び祝うという吊いの儀礼であり、それは植生と農業生活の再生を象徴していた。

タンムズのために泣くことは、偽の「後の雨」のメッセージを象徴しており、これはW・W・プレスコットの福音が表していたものである。1863年の反逆に始まった預言の土台の取り去りは、1919年に一つの段階に達し、ラオデキア的アドベンチズムが偽の福音の確立を許すに至った。その偽の福音は、背教的プロテスタンティズムの方法論に全面的に基づいていた。その当初の立案者はW・W・プレスコットであり、ウィリアム・ミラーの場合と同様に、両者の福音はダニエル書にある「the daily」に関する彼らの基礎的理解に基づいていた。ミラーが最初に「the daily」が異教を表していると発見したテサロニケ人への第二の手紙の箇所には、両方の福音が表されている。その箇所には、パウロが提示した真理を受け入れるミラーに代表される一群の人々と、真理への愛を持たないもう一つの一群の人々がいる。

終わりの時代には、ミラーに代表される一つの陣営が「見分けて」後の雨を受け取り、プレスコットに代表される別の陣営は強い惑わしを受ける。彼らが受けるその強い惑わしは、そもそも福音ではない偽りの福音に基づいており、それが後の雨に関する偽りのメッセージの正体である。ゆえに、エゼキエルの第三の忌むべきことは、タンムズのために泣く女たち（ラオデキア的アドベンチズムの諸教会）である。彼女たちの夏の涙（雨）は、収穫の実を生み出すためのものである。

後の雨のメッセージには二種類あるという区別は、聖書と預言の霊全体を貫いている。聖書は、不従順な民には雨が与えられないことを繰り返し示している。

人は言う、「もし男が妻を離縁し、彼女が彼のもとを去ってほかの男のものになったなら、その男はふたたび彼女のもとに帰るだろうか。あの地はひどく汚されないだろうか。」しかし、おまえは多くの愛人たちと姦淫を重ねた。それでもなお、わたしのもとに帰れ、と主は言われる。目を上げて高き所を仰ぎ見よ。おまえが男と寝なかった場所がどこにあるか見よ。おまえは荒野のアラビア人のように、道々に座して彼らを待ち受け、自分の淫行と悪事によってその地を汚した。それゆえ、にわか雨は止められ、後の雨も降らなかった。それでもおまえは娼婦の額を持ち、恥を知ろうとしなかった。エレミヤ書 3:1-3

ラオデキア的アドベンチズムは1863年に姦淫を行い始め、それ以来ずっと雨は差し止められてきた。彼らは自らの反逆を恥じることを拒み、その謙遜の欠如が淫婦の額を生み出す。そして聖書の預言における淫婦とは教皇制のことである。第三世代において、ローマの淫婦の刻印にひれ伏すための最終的な備えの働きが成し遂げられる。第四世代への備えは、第三世代において、後の雨の偽りのメッセージによって成し遂げられる。1863年の反逆、1888年の反逆、1919年の反逆は、2001年9月11日と結びつけられており、なぜならそのときニューヨーク市の建物が崩れ落ち、黙示録18章の力ある御使いが下り、本物の後の雨が始まったからである。

後の雨は神の民の上に降り注ぐ。力ある天使が天から下ってきて、全地はその栄光で照らされる。『Review and Herald』1891年4月21日。

後の雨が始まったとき、ラオデキア的なアドベンチズムの長老たちは、それを後の雨だとは認めなかった。彼らは、エゼキエルがタンムズのために泣く女たちとして表した偽りの後の雨のメッセージ、すなわち適用においては「平和だ、安全だ」というメッセージ

を教え込まれていたからである。

「自分に与えられている光に従って生きている者だけが、さらに大いなる光を受ける。もし私たちが、キリスト教の徳を積極的に実践することにおいて日々前進していなければ、後の雨における聖霊の顕現を認識できない。私たちの周囲の人々の心にそれが降り注いでいるかもしれないが、私たちはそれを見分けることも受けることもできない。」『牧師への証言』507。

人々の守護者たちにとって後の雨の到来を認識することは不可能であった。というのも、彼らの偽りの「後の雨」という偽福音は、かつての時代にあったような神の力のいかなる顕れの可能性も否定していたからである。

教会において、神の力の驚くべき現れがあるだろう。しかし、主の前にへりくだらず、告白と悔い改めによって心の戸を開かなかった者たちには、それは働かない。神の栄光によって地を照らすその力の現れにおいて、彼らは、自分たちの盲目のゆえに危険だと見なす何か、恐れを呼び起こす何かとしか見ず、それに抗おうとして身構えるだろう。主が彼らの考えや期待どおりに働かれないので、彼らはその働きに反対する。「なぜ」と彼らは言う。「私たちはこんなにも多くの年月この働きに携わってきたのに、どうして神の御霊を知らないはずがあるだろうか。」-彼らが神からのメッセージの警告や懇願に 응답せず、執拗に「私は富んでおり、財が増し、何も必要としていない」と言い続けてきたからである。才能や長年の経験があっても、人は義の太陽の明るい光のもとに自らを置き、聖霊の賜物によって召され、選ばれ、備えられないかぎり、光の器とはならない。聖なる事柄を取り扱う者たちが、神の力強い御手のもとにへりくだるとき、主は彼らを高く引き上げられる。主は彼らを識別力ある者、御霊の恵みに富む者とされる。彼らの強固で自己中心的な性質、頑なさは、世の光から放たれる光の中で明らかにされる。「悔い改めないなら、わたしはすぐにあなたのところに行き、あなたの燭台をその置き所から取りのけよう。」心を尽くして主を求めるなら、主はあなたに見いだされる。Review and Herald, 1890年12月23日

エゼキエル書8章の長老たちは、1919年に「平和と安全」の福音を受け入れ、2001年9月11日が到来したとき、その激化する反逆の結実は、後の雨の到来を認識できないという形で現れた。終わりの時にあたる1989年から始まる歴史において、神はミラー派運動を寸分違わず繰り返された。ミラーはエリヤの象徴であり、エリヤはアハブに対して、エリヤの言葉によらなければ雨は降らないときっぱりと告げていた。

次回の記事で、アドベンティズムの第三世代についての考察を続けます。

自分自身の霊的な退歩を痛まず、また他者の罪を悼みもしない者たちは、神の印を持たないままにされる。主はその使者、すなわち手に殺戮の武器を持つ者たちに命じられる。「彼の後を追って町の中を行き、打て。容赦するな、憐れむな。老いも若きも、処女も幼子も女も、ことごとく殺せ。ただし、印のある者には近づくな。わたしの聖所から始めよ。」そこで彼らは、家の前にいた長老たちから始めた。

ここでわかるのは、教会-すなわち主の聖所-が、神の怒りの一撃を真っ先に受けたということである。神が大いなる光を与え、民の霊的な益の守護者として立っていた長老たちは、その委ねられた務めに背いた。彼らは、昔日のように奇跡や神の力の顕著

な現れを求める必要はないという立場を取った。時代は変わったのだ、と。こうした言葉が彼らの不信を強め、彼らは言う。「主は善も行わず、また悪もしない。主はあまりにも憐れみ深く、その民を裁きで訪れることはなさないのだ。」このようにして、「平安と安全だ」という叫びが、もはやラッパのように声を上げて神の民にその背き、ヤコブの家にその罪を示すことのない者たちの口から上がる。吠えようとしなないこの口のきけない犬どもこそ、侮られた神の正しい復讐を身に受ける者たちである。男も乙女も幼子も、皆ともに滅びる。

忠実な者たちが嘆き叫んでいた忌むべき事柄は、限られた人間の目に見分けうるものにすぎなかった。しかし、はるかに悪しき罪——純粹にして聖なる神の妬みを引き起こしたそれら——は明らかにされていなかった。心を探られる大いなるお方は、不義をなす者たちがひそかに犯したすべての罪を知っておられる。これらの者は、自らの欺瞞のうちに安住するようになり、主が長く忍耐しておられるゆえに、主は見えておられないと言い、そのうえ主が地を見捨てられたかのように振る舞う。しかし主は彼らの偽善を見抜き、彼らが細心の注意を払って隠していたその罪を、人々の前に明るみに出される。

身分や威厳、世俗の知恵のいかなる優越も、また聖なる職分の地位も、人が自らの欺きに満ちた心に任されるとき、原則を投げ打つのを防ぐことはできない。尊く正しいと見なされてきた者たちが、背教の首謀者であり、無関心や神のあわれみの濫用における典型であることが明らかになる。神は、彼らの邪悪な歩みをもはや容認せず、御怒りをもって容赦なく彼らに臨まれる。

主は、大いなる光にあずかり、他者に仕えるうえで御言葉の力を体験してきた者たちから御臨在を引かれることを、好んでなさない。彼らはかつて主の忠実なしもべであり、御臨在と導きにあずかっていたが、主から離れて他の人々を誤りに導いたため、神の御不興の下に置かれるのである。 Testimonies, volume 5, 211, 212.